高松市埋蔵文化財調査報告　第142集

放課後児童クラブ施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

2012年3月

高 松 市 教 育 委 員 会

例　　言

1　本書は，放課後児童クラブ施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，林宗高遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査地及び調査期間，調査面積は，次のとおりである。
調 査 地　　高松市林町　高松市立林小学校内
調査期間　　平成 22 年 11 月 24 日～12 月 6 日
調査面積　　55 ㎡

3　現地調査は，高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員　高上 拓が担当した。

4　整理作業は高上が担当した。

5　本報告書の執筆・編集は高上が担当した。

6　発掘調査から整理作業，報告書執筆を実施するにあたって，下記の関係諸機関から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
高松市立林小学校

7　標高は東京湾平均海面高度を基準とし，図中方位は座標北を指す。なお，これらの数値は世界測地系第Ⅳ系にしたがった。

8　出土遺物の実測図は，土器やその他土製品等は１／４，石器１／４，遺構の縮尺については図面ごとに示している。土器実測図中で，土師質土器は断面白抜き，須恵質土器は断面黒塗りで表す。

9　遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。

10　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過
　第1節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第2節　林宗高遺跡における既往の調査　・・・・1
　第3節　調査日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第4節　整理作業の体制と日程　・・・・・・・・・・・・3
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境
　第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第Ⅲ章　調査の概要
　第1節　調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第2節　調査区の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第3節　基本層序　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第Ⅳ章　調査の成果
　第1節　発掘調査成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第Ⅵ章　まとめ
　第1節　遺跡の時期的変遷　・・・・・・・・・・・・・17
　第2節　遺跡のひろがりと旧地形　・・・・・・・・・・17

挿　図　目　次

Fig. 1　発掘調査対象地と周辺の調査履歴・・・1
Fig. 2　林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図・・・・・2
Fig. 3　高松平野の地形図と林宗高遺跡位置図・・5
Fig. 4　SP1平・断面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
Fig. 5　調査区平面図・南北壁断面図・・・・・・・8
Fig. 6　調査区東西壁断面図・・・・・・・・・・・・・9
Fig. 7　黒褐色粘土層出土遺物①・・・・・・・・・・10
Fig. 8　黒褐色粘土層出土遺物②・・・・・・・・・・11
Fig. 9　黒褐色粘土層出土遺物③・・・・・・・・・・12
Fig. 10　黒褐色粘土層出土遺物④・・・・・・・・・・13
Fig. 11　黒褐色粘土層出土遺物⑤・・・・・・・・・・15

挿　表　目　次

Tab. 1　整理作業工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・3
Tab. 2　基準点座標一覧表・・・・・・・・・・・・・・・6

図　版　目　次

PL. 1　SP1検出状況（西から）
　　地山・黒褐色粘土層（北から）
PL. 2　弥生土器集合
PL. 3　1. 調査地遠景（南から）
　　2. 調査地北側遠景（西から）
　　3. 庇支柱施工予定地完掘状況①（西から）
　　4. 庇支柱施工予定地完掘状況②（西から）
　　5. 庇支柱施工予定地東壁断面（西から）
PL. 4　1.調査区北端完掘状況（西から）
　　2. 調査区南端完掘状況（東から）
　　3. 調査区東壁断面（南から）
　　4. 調査区北壁断面（西から）
　　5. SP1検出状況（北から）
　　6. SP1完掘状況（西から）
　　7. 調査区南壁東半断面（北から）
　　8. 調査区西壁南半断面（東から）
PL. 5　出土遺物写真

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

本調査地は，高松市立林小学校の校庭に位置する放課後児童クラブ施設建設予定地であり，周知の埋蔵文化財包蔵地「林宗高遺跡」内に位置する。本市教育委員会教育部生涯学習課（以下生涯学習課と呼称）が，当地での施設建設事業を計画したため，平成 22 年 7 月 26 日付けで埋蔵文化財保護法第 94 条に基づく発掘通知を提出されたものを，本市教委から県教委へ進達したところ，同月 28 日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて文化財課は生涯学習課と協議を行い，建設工事に先立ち発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意したため，本市教委は平成 22 年 11 月 24 日から同年 12 月 6 日にかけて，発掘調査を実施した。本書はこの発掘調査の成果を報告するものである。なお，放課後児童クラブ施設建設事業は平成 23 年度から担当課が生涯学習課から健康福祉部子育て支援課に変更になっており，同年度の整理作業は子育て支援課の予算にて実施した。

第２節　林宗高遺跡における既往の調査

林宗高遺跡は高松市林町に所在し，地勢的には高松平野中央部のやや南東よりに位置する。既往の調査地点を示したのが Fig. 1 である。本市教委では平成 21 年度に林小学校校舎新設工事に伴う発掘調査を実施しており，弥生時代後期後半と古代の遺構を確認している。中でも弥生時代後期後半の自然河川からは，多量の土器がまとまって出土しており，土器の供給源となる集落が近隣に所在することが推測された。また，今回の発掘調査地に隣接した地点で平成 21 年 12 月に林小学校拡張用地造成工事に伴う工事立会を実施しており，弥生土器を包含した黒色粘土層の広がりを確認している。このように，今回の発掘調査対象地周辺では弥生時代後期後葉の土器を多量に含む遺物包含層が低地性の堆積層として広く認められることが確認できる。以下では今回の調査成果を報告する。

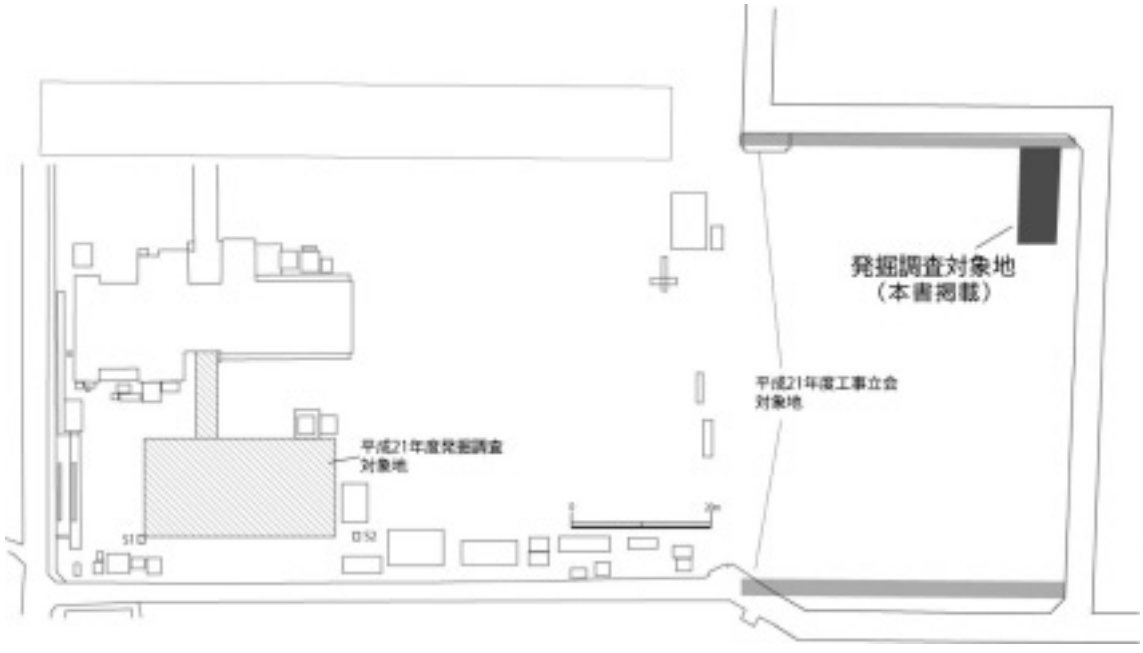


Fig. 1　発掘調査対象地と周辺の調査履歴

1．林宗高遺跡　2. 鹿腹遺跡　3. 天満・宮西遺跡　4. 松縄城跡　5. 木太中村遺跡　6. 陣内城跡　7. 木太本村Ⅱ遺跡
8. 白山神社古墳　9. 木太本村遺跡　10. 向上跡　11. 佐藤城跡　12. キモンドー遺跡　13. 松縄下所遺跡
14. 境目・下西原遺跡　15. 大荒神古墳　16. 上西原遺跡　17. 大池遺跡　18. 弘福寺領田図北地区比定地　19. 木太町九区遺跡
20. 林浴遺跡　21. 林下所遺跡　22. 林下所遺跡　23. 林下所・木太今村遺跡　24. 林下所遺跡　25. 林下所・六条乾遺跡
26. 林下所遺跡　27. 上天神遺跡　28. 太田下・須川遺跡　29. 蛙股遺跡　30. 居石遺跡　31. 井手東Ⅱ遺跡　32. 井手東Ⅰ遺跡
33. 浴・長池Ⅱ遺跡　34. 浴・長池遺跡　35. 浴・松ノ木遺跡　36. 林・坊城遺跡　37. 六条・上所遺跡　38. 太田城跡
39. 汲仏遺跡　40. 多肥下町下所遺跡　41. 天皇西原遺跡　42. 宗高坊城遺跡　43. 六条西村遺跡　44. 六条城跡
45. 北原遺跡　46. 六条上川西遺跡　47. お茶荒神　48. 松林遺跡　49. 凹原遺跡　50. 日暮・松林遺跡　51. 多肥松林遺跡
52. 多肥宮尻遺跡　53. 池の内遺跡Ⅱ　54. 池の内遺跡Ⅰ　55. 弘福寺領田図南地区比定地　56. 空港跡地遺跡　57. 畑遺跡
58. 拝師廃寺　59. 一角遺跡　60. 公務員宿舎遺跡　61. 上林遺跡　62. 宮西・一角遺跡　63. 多肥平塚遺跡　64. 多肥廃寺

Fig. 2　林宗高遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺＝１/25,000）

第３節　調査日誌

平成 22 年

11 月 24 日　　機材搬入・重機掘削開始
11 月 29 日　　遺構上面の検出完了
11 月 30 日　　遺物包含層の人力掘削を開始
12 月 4 日　　断割調査完了
12 月 6 日　　図化・写真撮影完了　発掘調査完了

第４節　整理作業の体制と日程

整理作業は平成 23 年 11 月 1 日から開始し，平成 24 年 3 月 29 日に終了した。進捗状況は下表のとおりである。

Tab. 1　整理作業工程表

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
洗浄								■				
接合･復元								■				
遺物実測								■				
遺構図レイアウト								■				
遺構図トレース								■				
遺物レイアウト								■				
遺物トレース								■				
遺物写真撮影									■			
写真レイアウト									■			
原稿執筆										■		
編集										■	■	■

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

本遺跡の立地する高松平野は，平野を南北に貫く複数の河川の堆積作用により形成されたものである。平野には本津川，香東川，御坊川，詰田川，春日川，新川などの河川が流れるが，中でも香東川の堆積作用が最も強く，春日川の西側付近まで香東川の堆積作用による平野が広がる。また，現在は埋没しているが，平野中央部の林町から木太町にかけての範囲で複数の旧河道が存在したことが指摘されている。林宗高遺跡の周辺でも，長池や大池などを結ぶ旧河道の存在が推定されており，平成 21 年度に，今回の調査地から西へ約 100ｍの地点において実施した発掘調査（高松市教育委員会 2010）でも北西に向かう旧河道を検出している。また，詳細は以下に記すが，今回の調査地でも東から西に向かって下降する緩やかな傾斜を確認しており，堆積する土壌から低湿地であったと推測している。微細な起伏に富んだ地理的状況にあったことが推測される。

第２節　歴史的環境

今回の発掘調査で確認した弥生時代と古代について，周辺の歴史的環境を確認しておきたい。なお，それ以外の時期の歴史的環境については平成 21 年度刊行の発掘調査報告書（高松市教育委員会 2010）を参照いただきたい。

弥生時代　高松平野では，縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて，平野部での集落の形成が顕著に認められる。林町周辺の高松平野中央部でも，浴・長池遺跡，井手東Ⅱ遺跡，上西原遺跡，東中筋遺跡，宗高坊城遺跡などの遺跡は，縄文晩期から継続することが知られる。この後，前期末～中期前半に継続する集落は少ない。浴・長池遺跡で前期から中期前葉まで連続した居住が認められるのを除けば，新たに生活の痕跡が認められるのは中期中葉以降である。上天神遺跡，松林遺跡，松並・中所遺跡などで居住の痕跡が認められる。中期後半～後期前半にかけては，太田下・須川遺跡，上天神遺跡などで集落跡が確認される。後期後半には，凹原遺跡，空港跡地遺跡，日暮・松林遺跡，天満・宮西遺跡，宗高坊城遺跡などで再度集落が形成され，一部はその後，終末期から古墳時代前期前半まで継続する様子が認められる。今回の発掘調査で検出された遺構もこの時期に属するものである。今回の調査で居住域の確認はできなかったものの，弥生時代の高松平野では集落の形成と解体が繰り返し認められ，長期間継続する集落が少ないという特徴が指摘されている。

古代　古代の高松平野は大きく西部の香川郡，東部の山田郡に分割され，平野部のほぼ全面に南北線が東に約９～11°傾く条里地割が分布する。この条里地割に沿った溝や建物跡が松縄下所遺跡，空港跡地遺跡，汲仏遺跡などで検出されている。高松平野では古墳時代後期～古代の前半にかけて，それまで集落域の営まれていた微高地が埋没したとされ，それに伴い集落の断絶と形成が認められる。今回の発掘調査では，明確な遺構を確認することはできなかったが，古代に属する遺物が一定程度確認できている。平成 21 年度に近隣で実施した発掘調査では弥生時代の自然河川が一度埋没し，平坦な地形が形成されたのちに古代に再度遺跡が形成される様子を確認している（高松市 2010）。今回の発掘調査成果もこうした近隣の調査状況と合致するものであり，弥生時代後期後葉と古代にわたって遺跡の形成がなされたものと考えられる。

参考文献

高松市教育委員会 2010『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財発掘調査報告書第 127 集

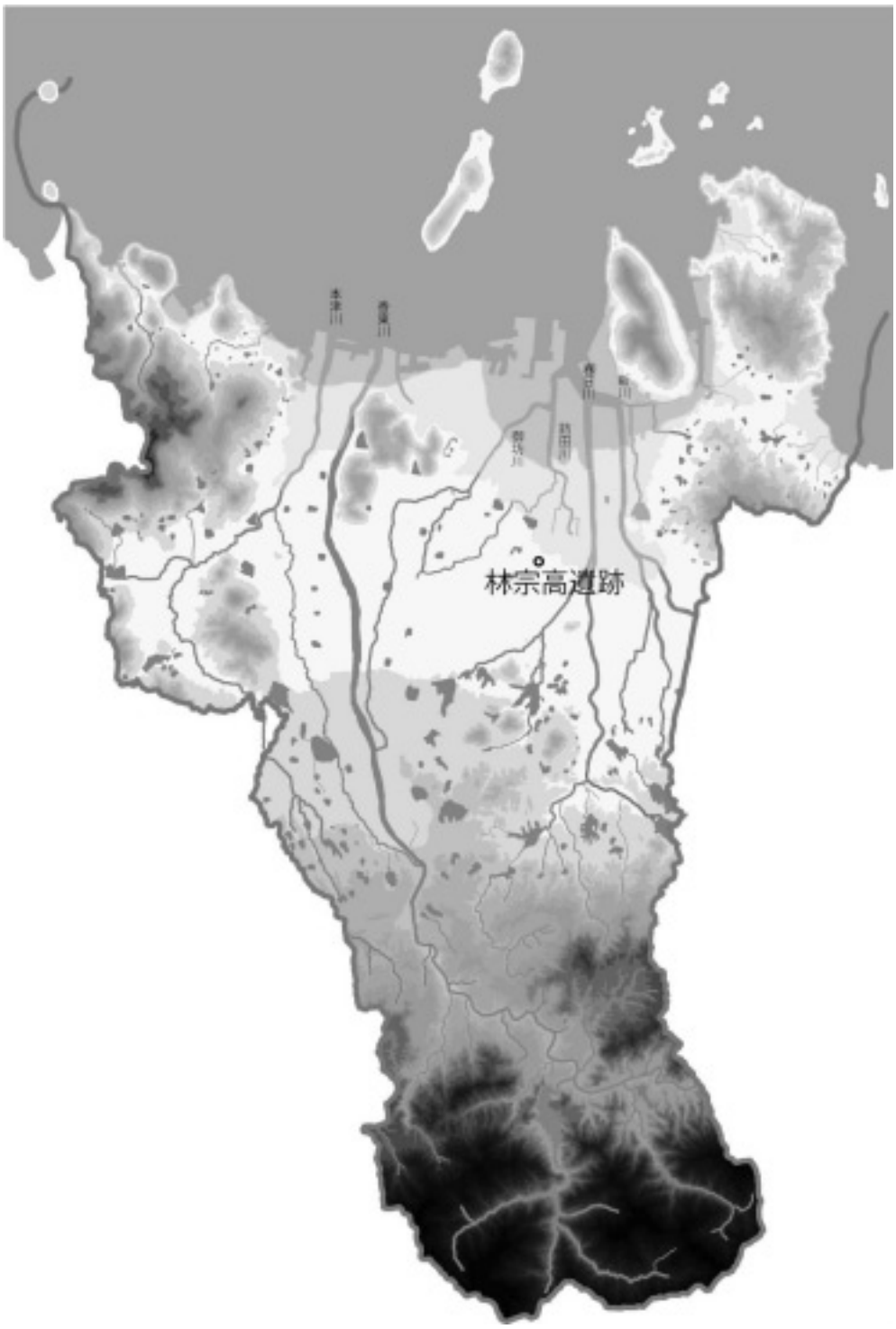


Fig. 3　高松平野の地形と林宗高遺跡位置図(スケールアウト)

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法　　調査対象地は，高松市立林小学校の校庭に位置する放課後児童クラブ施設建設予定地である。平成 21 年度に実施した林小学校拡張用地造成工事に伴う工事立会（第Ⅰ章参照）において，該当地の隣接地における遺構面の深度が判明していたため，生涯学習課と工事図面を基に事前協議を行った。協議の結果，基礎施工部分については，建物基礎が遺物包含層の上面までおよぶことが判明した。この遺物包含層は非常に広範囲に堆積した低地性の堆積層であり，多量の遺物を含むことが判明していた。このため，基礎施工部分については遺物包含層の上面から 30cm の深度まで発掘調査し，発掘調査後にクラッシャー層を 30cm 敷いて保護層とすることとした。従って，発掘調査は重機による遺物包含層の上面までの掘削と，人力による遺構埋土の掘削を基本として行った。ただし，堆積状況を確認するために，調査区の四隅にそれぞれ断割り調査区を設定し，30cm を超えて地山層まで発掘調査を行っている。断割り調査を基にした旧地形の把握は本章第Ⅱ章にて詳述している。

記録に際しては調査地周囲の道路上に所在する２点の基準点を基に図化を行った。各基準点の座標は Tab. 2 のとおりである。図面は平面図を縮尺１/50，断面図を１/20 で作図した。写真撮影は 35mm フィルムカメラを主に用い，モノクロ・カラーリバーサルフィルムで記録した。また，補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

Tab. 2　基準点座標一覧表

	TK12	TK13
X	144473.643	144463.643
Y	52531.198	52575.365

（数値は世界測地系第Ⅳ系による）

第２節　調査区の概要　　調査対象地は南北長約 13.5m，東西長約７ｍの長方形を呈する。このうち，発掘調査の対象となったのは四周の基礎設置部分であり平面形状は「ロ」の字状を呈する。また，長方形部分の北側で庇支柱施工予定地が同様に発掘調査対象地となり，１辺１ｍの正方形４箇所が東西に並ぶ。

前節にて述べたとおり，調査に当たり２点の基準点（TK12・TK13）を基に記録を行った（Tab. 2）。この基準点を基にした調査区の座標は Fig. 5 に示している。

第３節　基本層序　　発掘調査の対象となった範囲は狭小であり，また掘削深度も第１節で述べたように限定的であるが，調査区の各端で実施した断割り調査の成果を基に基本層序についてまとめる。

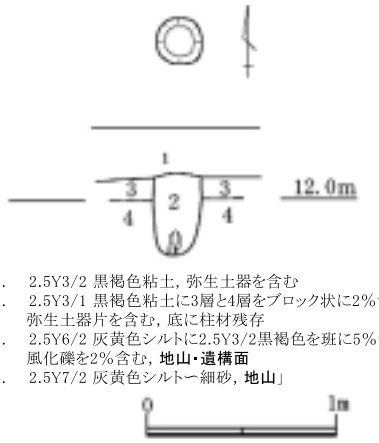
調査地は小学校の校庭として利用されていたため，表土は校庭の花崗土である。表土下 0.4～0.5ｍの深度までは花崗土が敷き均されており，さらに下層には厚さ約 0.4～0.5ｍの厚さで雑多な混和物を含む造成土が堆積している。花崗土と造成土の下層からは，灰色系粘土からなる旧耕作土・床土の堆積状況を確認している。さらに下層には，黒褐色粘土層が調査区全体に平均して 0.3～0.4ｍの厚さで堆積している。この黒褐色粘土層は多量の弥生土器を包含する遺物包含層であり，湿地性の堆積層であると考えられる。黒褐色粘土の下層には，灰黄色シルトを基調とする地山層を検出した。南東隅の断割り調査では，後述する SP１が地山層を基盤層として形成されている状況を確認できた。一部の状況からの推測だが，黒褐色粘土層の下層に遺構が面的に広がっていた可能性も考えられる。

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　発掘調査成果

弥生時代の遺構として認識できるのは，ピット１基のみである。その他は低湿地ないし旧河道の埋土の可能性が考えられる遺物包含層より，多量の弥生土器片が出土している。およそ 17 ㎥の掘削土量で，28ℓ入りコンテナボックス 20 箱分の遺物が出土した。以下ではピットと遺物包含層より出土した遺物を中心に報告する。

ＳＰ１　南東隅の断割り調査区の中で検出したピットである（Fig. 4）。黒褐色粘土層を掘削し，地山面を検出したところで検出した。基盤層は灰黄色シルトからなる地山層であり，埋土は黒褐色シルトである。埋土中には，地山層がブロック状に混和しており，掘削土起源の埋土により埋没した可能性が考えられる。遺物は弥生土器片がいくつか出土しているが，すべて小片であり，所属時期等を確定することはできない。ただし，１層は後述する弥生時代後期後葉を中心とした時期の遺物包含層であるため，後期後葉以前の所属時期が堆積状況からは導かれる。また，埋土中より，柱材と考えられる木片を１点検出している。



1. 2.5Y3/2 黒褐色粘土，弥生土器を含む
2. 2.5Y3/1 黒褐色粘土に3層と4層をブロック状に2%含む 弥生土器片を含む，底に柱材残存
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルトに2.5Y3/2黒褐色を斑に5%含む 風化礫を2%含む，**地山・遺構面**
4. 2.5Y7/2 灰黄色シルトー細砂，**地山**」

Fig. 4　SP１平・断面図（縮尺 1/40）

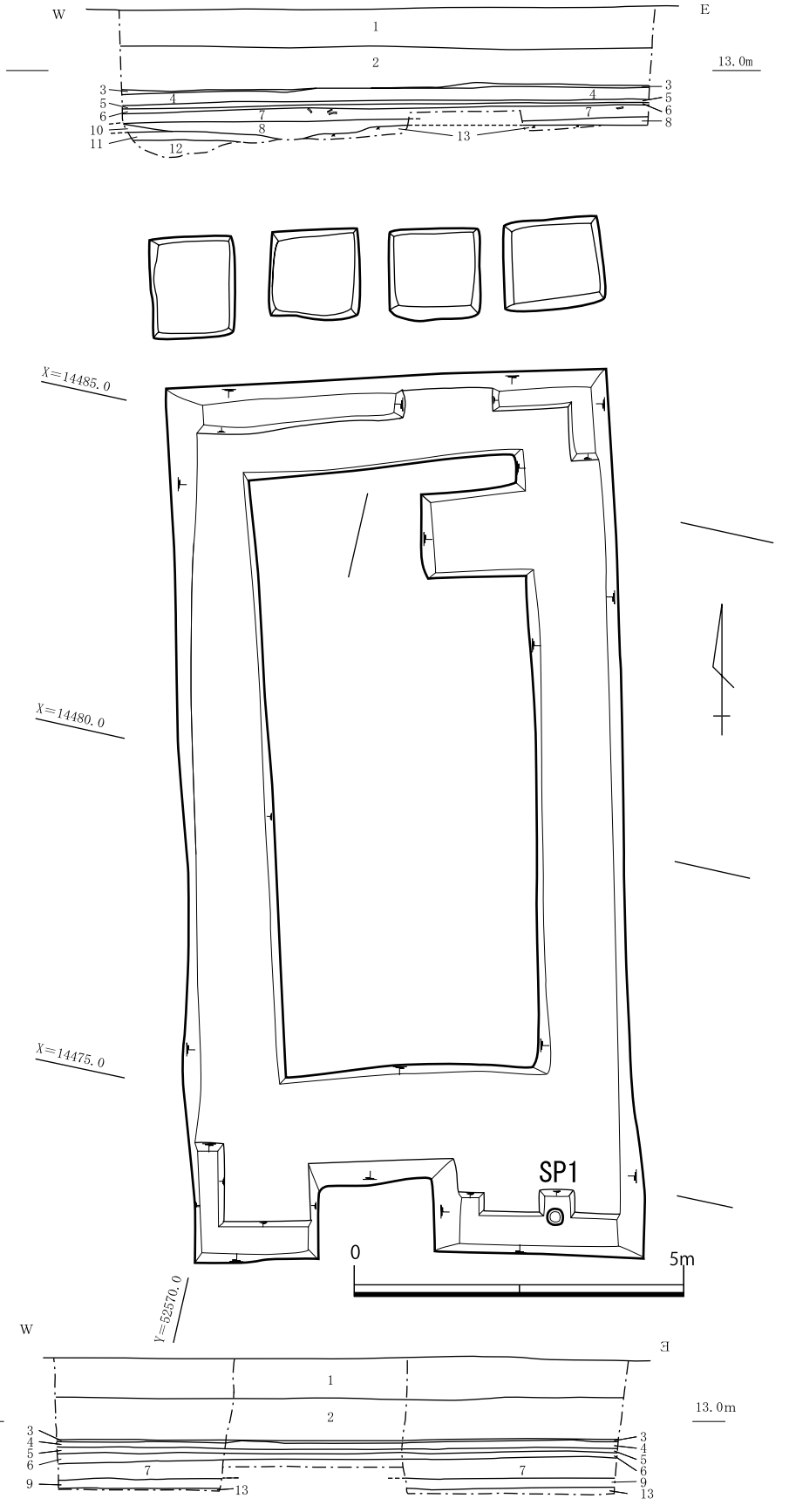
黒褐色粘土層　調査地の全範囲で確認した遺物包含層である。堆積状況は基本層序にて述べたとおりであるが，調査区角隅の断割り調査から，旧地形の推測が可能である。

南東隅・南西隅では地山層が標高 12.1m付近でほぼ水平に確認できる一方，北東隅では12.3mを測り，南西に向かって傾斜して下がる。つまり，北東隅が他の地点よりも標高が高い地形であったことが分かる。こうした状況から，調査対象地は全域が低地性の堆積環境にあり，中でも南西側に向かって標高が下がる微地形であったことが推測される。以下では本層から出土した遺物について報告する。

１は土師器の底部である。全体的に磨耗が著しいが，高い高台を有する。２は須恵器甕の口縁部である。外面に自然釉が付着する。３は須恵器蓋の口縁部である。４は摘み付きの須恵器蓋である。５は須恵器ハソウの体部である。体部に１条の波状文が巡る。６は須恵器甕の体部である。外面には平行タタキ，内面は丁寧に撫でており，頸部付近であると考えられる。７・８は須恵器坏底部である。底部切り離しはヘラ切りによる。

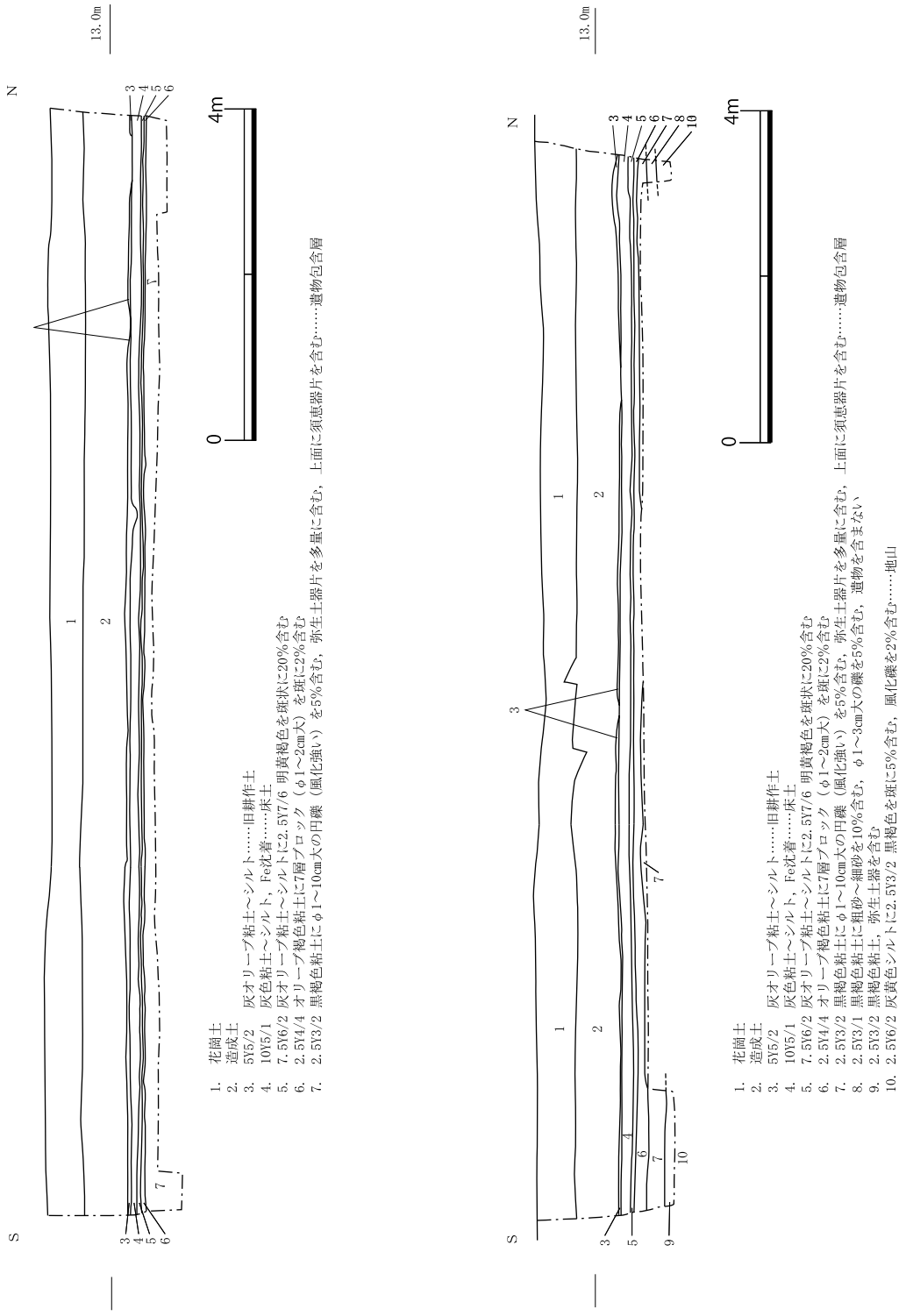
９から 98 は弥生土器である。以下では器種ごとに報告を行う。

【壺】９～16・19～23 は広口壺である。９～11 はいずれも胎土に角閃石を稠密に含む，いわゆる香東川下流域産土器である。いずれも頸部は直立しており，11 は頸部に３条の凹線を巡らせる。12～21 までは，白色～黄橙色の軟質な胎土で焼成も良好でない。12 は頸部が短く，やや外反する。13 は広口壺の口縁部である。端部は上方へ伸びず，明確な面を有する。14 は短くやや内湾する頸部からなだらかに口縁部に続く。15・16 は口縁端部を上方に伸びる資料で，15 では粘土接合痕も観察でき，３条の凹線が巡る。17 は口縁部が外方に直線的に伸びる二重口縁壺である。器壁は薄いが，磨耗が著しい。18 は二重口縁壺の頸部である。口縁端部は欠損しているが，口縁部が緩やかに外反する。20 は広口壺の頸部か。比較的長い頸部で，内外面ともに細かなハケ調整で仕上げる。21 は大型の広口壺でやや外反



1. 花崗土
2. 造成土
3. 5Y5/2　灰オリーブ粘土～シルト……旧耕作土
4. 10Y5/1　灰色粘土～シルト，Fe沈着……床土
5. 7.5Y6/2 灰オリーブ粘土～シルトに2.5Y7/6 明黄褐色を斑状に20%含む
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土に7層ブロック（φ1～2cm大）を斑に2%含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色粘土にφ1～10cm大の円礫（風化強い）を5%含む，弥生土器片を多量に含む，上面に須恵器片を含む……遺物包含層
8. 2.5Y3/1 黒褐色粘土に粗砂～細砂を10%含む，φ1～3cm大の礫を5%含む，遺物を含まない
9. 2.5Y3/2 黒褐色粘土，弥生土器を含む
10. 2.5Y3/2 黒褐色粘土～シルトに粗砂～細砂を10%含む，φ1～5cm大の礫を10%含む，遺物を含まない
11. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂～細砂　　地山か
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂～粗砂φ1～5cm大の風化礫を5%含む，地山か
13. 2.5Y6/2 灰黄色シルトに2.5Y3/2 黒褐色を斑に5%含む，風化礫を2%含む……地山

Fig. 5　調査区平面図（縮尺=1/100）・南北壁断面図（縮尺=1/80）



1. 花崗土
2. 造成土
3. 5Y5/2　灰オリーブ粘土～シルト……旧耕作土
4. 10Y5/1　灰色粘土～シルト，Fe沈着……床土
5. 7.5Y6/2 灰オリーブ粘土～シルトに2.5Y7/6 明黄褐色を斑状に20%含む
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土に7層ブロック（φ1～2cm大）を斑に2%含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色粘土にφ1～10cm大の円礫（風化強い）を5%含む，弥生土器片を多量に含む，上面に須恵器片を含む……遺物包含層

1. 花崗土
2. 造成土
3. 5Y5/2　灰オリーブ粘土～シルト……旧耕作土
4. 10Y5/1　灰色粘土～シルト，Fe沈着……床土
5. 7.5Y6/2 灰オリーブ粘土～シルトに2.5Y7/6 明黄褐色を斑状に20%含む
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土に7層ブロック（φ1～2cm大）を斑に2%含む
7. 2.5Y3/2 黒褐色粘土にφ1～10cm大の円礫（風化強い）を5%含む，弥生土器片を多量に含む，上面に須恵器片を含む……遺物包含層
8. 2.5Y3/1 黒褐色粘土に粗砂～細砂を10%含む，φ1～3cm大の礫を5%含む，遺物を含まない
9. 2.5Y3/2 黒褐色粘土，弥生土器を含む
10. 2.5Y6/2 灰黄色シルトに2.5Y3/2 黒褐色を斑に5%含む，風化礫を2%含む……地山

Fig. 6　調査区東西壁断面図（縮尺=1/80）

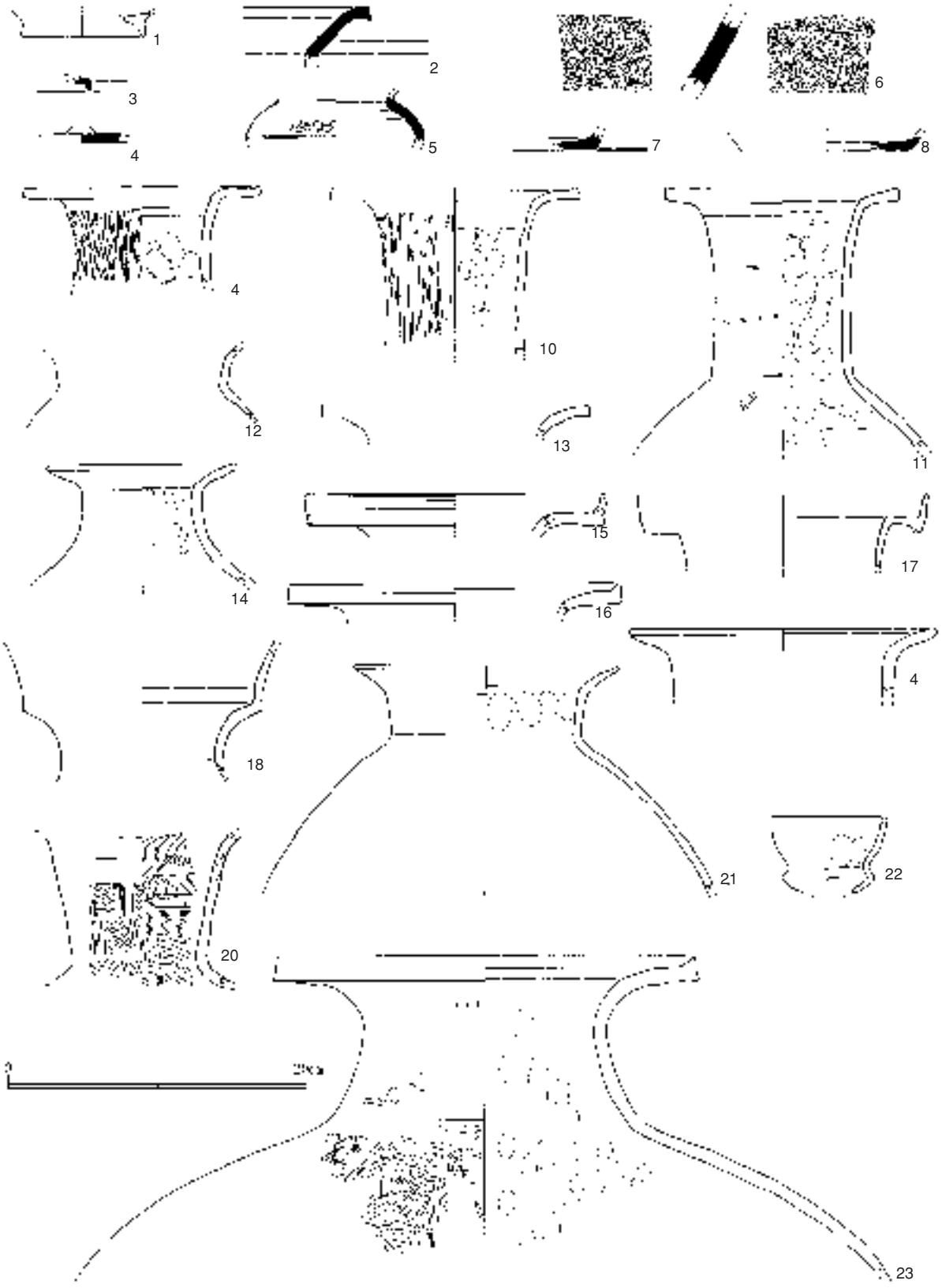


Fig. 7　黒褐色粘土層出土遺物①（縮尺= 1 / 4 ）

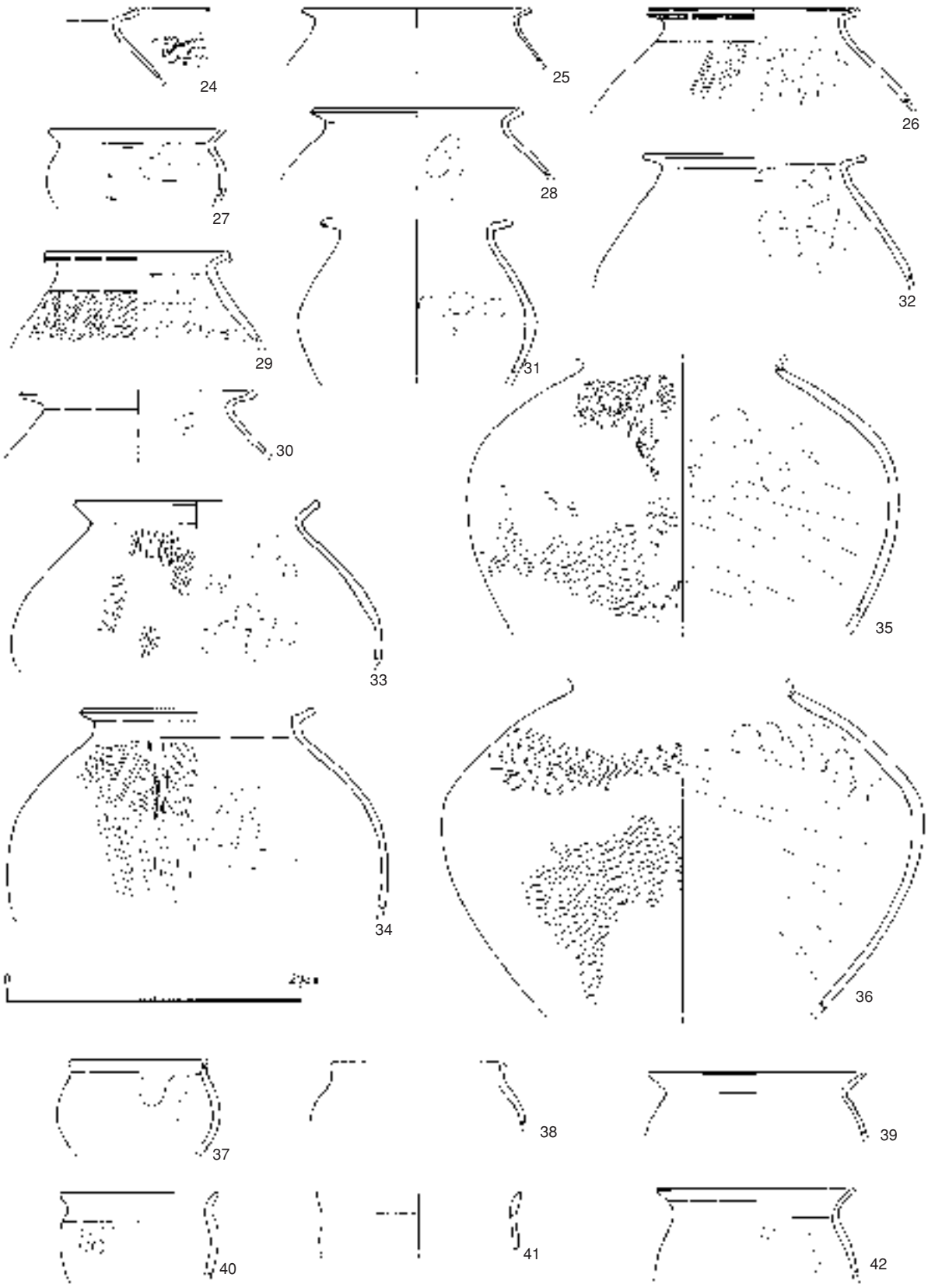


Fig. 8　黒褐色粘土層出土遺物②（縮尺= 1 / 4 ）

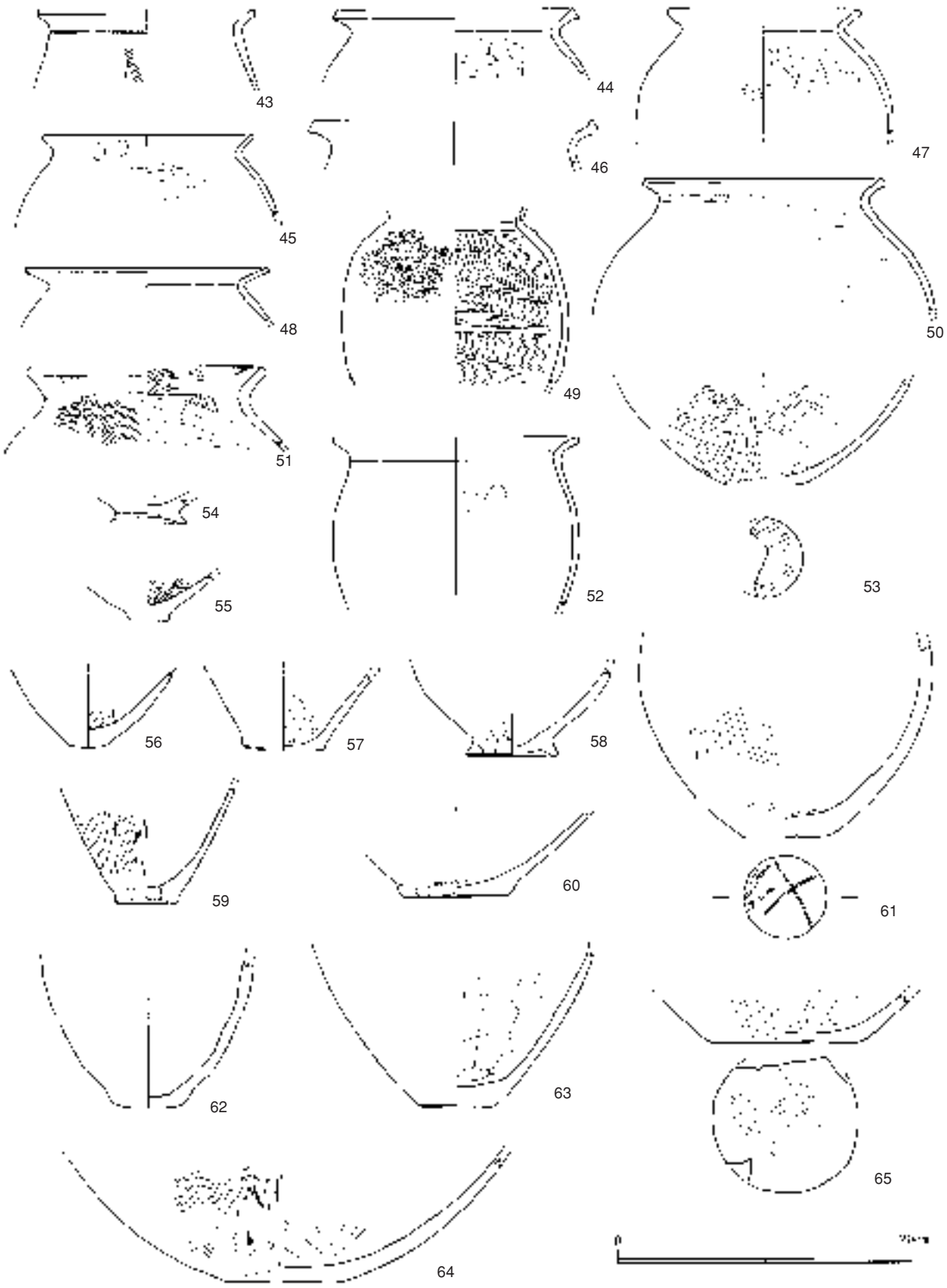


Fig. 9　黒褐色粘土層出土遺物③（縮尺＝1/4）

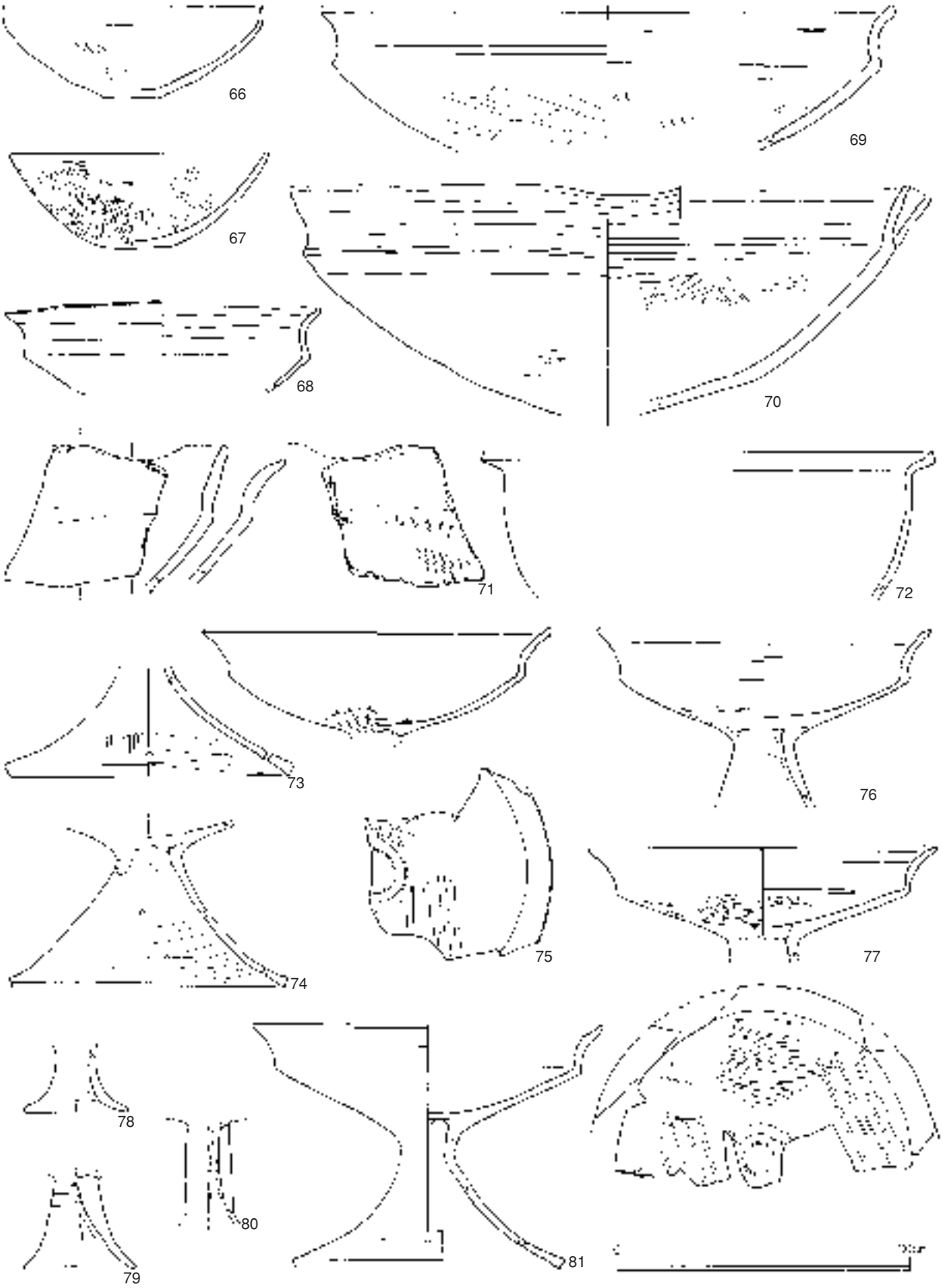


Fig. 10　黒褐色粘土層出土遺物④（縮尺= 1 / 4 ）

する頸部から口縁部につながる。体部は球形に近い形状が推測される。22 は小型丸底壺である。口縁端部をわずかに欠損するものの，口縁部から底部にかけて残存している。23 は広口壺である。外面は細かなハケ調整，内面はナデ調整で仕上げる。

【甕】24～52 は甕である。24～36 は胎土中に角閃石を稠密に含むいわゆる香東川下流域産土器である。24・25・28・30～33 は口縁部が肥厚せず，直線的におさめる。29 は口縁端部を上下両方につまみ出し，肥厚させる。口頸部付近はナデ調整のみで，体部中位からケズリ調整で薄く仕上げる。34 は短い口縁部に，不明瞭でやや直立気味の口頸部が続く。体部外面下半にはシガキ調整が施され，内面下半はケズリ調整で仕上げる。35・36 は体部である。36 は胴部の張り出しが大きい。37～42 は小型の甕である。口縁部の屈曲が不明瞭で，弱く直立ないし外反する。ナデ調整で仕上げられ，粘土接合痕が確認できる個体もある。43 は口頸部に３条の沈線が巡る。44・46 は口縁端部に明瞭な面をもち，張り出す形状を呈する。47･50 は内面の口頸部付近までケズリが及び外面には一部ミガキ調整が認められる。49 は楕円形のプロポーションを呈する体部で，内面は口頸部までハケ調整で仕上げる。外面にはタタキ痕が明瞭に残る。51 は緩やかに屈曲する厚手の口縁部をもち，口縁部内面をハケ調整で仕上げる。ケズリは口頸部まで及ぶ。52 は緩やかに外反する口縁部で，体部はあまり広がらず，直立に近い形状である。

【底部】53～65 は底部である。53 は香東川下流域産の底部，54～65 は白色系の胎土である。53 はやや丸みを帯びた平底で，外面は底面までミガキ調整を施す。内面はケズリ調整で薄く仕上げる。54・58 は底部をつまみ出し，高台状の突出部を作り出す。55・56・58～62 は，内面のケズリ調整が明瞭でなく，厚手に仕上げている。55 は底部内面に放射状にハケ目を施す。57･63～65 はケズリ調整が認められ，薄手につくり出す意図が認められる。61 は底面に棒状の圧痕が「×」字状に認められる。65 は外面ならびに底面にミガキ調整を施している。

【鉢】66・67・69～72 は鉢である。66・69～71 は香東川下流域産土器である。67・72 は白色系の胎土である。66 は短く直立する口縁部をもち，底部は平底である。69・70 は大型の鉢で，70 は片口部が残る。71 も大型鉢の片口部である。72 は短く外反する口縁部をもち，緩やかに内反する体部形状を呈す。器形から鉢と報告しているが，口縁部形状からは甕である可能性も考えられる。

【高坏】68・73～89 は高坏である。68・73～81 は香東川下流域産土器である。73～77・81 をみると，口縁端部・脚端部ともにほとんど肥厚せず，直線的におさめる。八の字状に広がる脚部には複数箇所の小円孔を穿つ。74 では上段に１箇所以上，下段には２孔１対で１箇所以上穿孔されたことが分かる。81 では下段の２孔１対が確認できる。坏部と脚部の接合部には円盤充填が確認できる。坏部外面には分割ヘラミガキが確認できる。75・77 には，坏部の底面に脚部の接合位置を示したものと考えられる線刻が認められる。78～80 は小型の高坏である。78 は緩やかに外反する脚部で，内面にシボリメが確認できる。79 は坏部との接合部付近に７条の沈線を巡らせる。接合痕の状況から，脚部を成形したのちに坏部を継ぎ足す形で成形したものと考えられる。80 は厚手の直線的な脚部で，内面のシボリメが顕著である。82～86 は小型・厚手の脚部である。83・85 では，脚部と坏部を接合する際，あるいは接合後に脚部内面から棒状工具で押圧を加えた痕跡が確認でき，香東川下流域産の高坏とは接合技法が異なるようである。85 には屈曲部に明瞭な爪痕が残る。86 は接合痕の状況から，坏部と脚部を別作りで接合したものと考えられる。87 は直線的な口縁部を持つ高坏か。88・89 は大型で薄手の一群である。88 はやや脚端部が肥厚し，89 には小

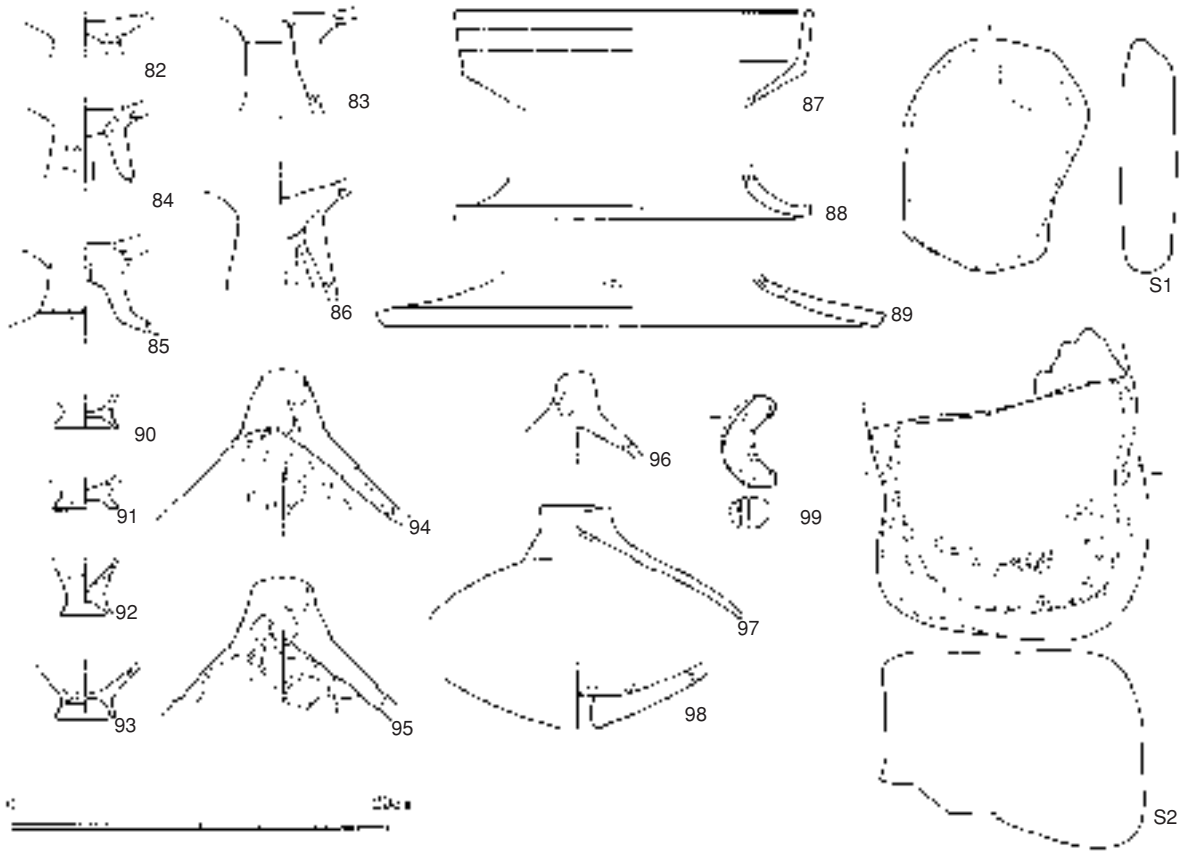


Fig. 11　黒褐色粘土層出土遺物⑤（縮尺=１/４）

円孔が認められる。

【製塩土器】90 から 93 は製塩土器の脚部である。脚台のつく形状で，薄手に仕上げる。体部を確認することはできていないが，形状から体部が直立するプロポーションが推測される。

【その他】94～97 は蓋である。94 は外面を板ナデで仕上げ，96 はタタキ後のナデで仕上げる。97 は径の小さい高台状のつまみをもつ。内面にシボリメらしき痕跡が見られる。摩滅が著しく，調整は不明である。98 は甑である。底面に円孔１箇所を穿つ。99 は土製勾玉である。頭部をやや欠損するがほぼ完形であり，円孔１箇所を穿つ。S1 は摺り石 S2 は台石である。S1 は砥面が不明瞭であるが，S２は明瞭な砥面を有する。

小結

以上，出土遺物の概要について記したが，既に述べたように遺物包含層上面の掘削に伴う資料であり，包含層中の全ての遺物を回収したわけではない。断割りを行った箇所では包含層中の最下位部分からの遺物も回収できているが，その他の部分では包含層中の上位部分から検出した資料のみである。こうした調査段階の制約を断った上で，本層の所属時期を考えたい。遺物の大半を占めるのは弥生土器である。器種組成を見ると壺では広口壺・複合口縁壺・二重口縁壺が見られ，１点であるが小型丸底壺も認められる。甕・高坏・鉢では小型～大型に法量分化が進んでいる。口縁部などの形状を見ても，資料群中に大きな時期差は認められず，これらの特徴からこの土器群は下川津Ⅰ式新相−Ⅱ式（大久保 1990），Ⅴ−４様式～Ⅴ−５様式（真鍋 2000）におおむね比定できる。

角閃石を稠密に含む香東川下流域産の土器が一定量認められる一方，それ以外の胎土・調整により製作された土器もかなりの量にのぼる。胎土をみても白色～橙色にかけての軟質な胎土から，器面が褐色を呈し，香東川下流域産土器と類似しながらも角閃石を含まない資料など，多様である。これらの胎土の土器は製作技法も香東川下流域産の資料と異なる点が多く観察でき，今後類例の増加を待ち整理する必要がある。

一方，少量ではあるが，黒褐色粘土層の上面より須恵器片等が出土している。小片のみであり，詳細な時期比定は困難であるが，８世紀を中心とした時期が推測される。遺構は確認できていないが，平成 21 年度の発掘調査では古代の遺構面を検出しており，周辺での遺跡形成が再度なされたことによるものであろう。

（主要参考文献）

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前期の土器について」『下川津遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　香川県教育委員会ほか

乗松真也 2006「高松平野の白い土器」『十瓶Ⅱ山』田村久雄先生傘寿記念文集

真鍋昌宏 2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社

第Ⅵ章　まとめ

第１節　遺跡の時期的変遷

（１）弥生時代

明確に遺構が確認できたのは，SP１のみである。ただし，SP1 は限定して行った断割り調査区にて検出した遺構であり，今回保護層を設けて現地に保存した遺物包含層の下層に遺構が広がっている可能性は否定できない。周辺の調査の蓄積と併せて検討すべき課題である。いずれにせよ，柱穴を伴うような構造物が遺物包含層の堆積以前に確実に存在していたことが指摘できる。当地域の弥生時代における集落域の変遷と地形利用，また自然環境の変化との関係を考える上で重要な知見である。

出土した弥生土器は後期後葉に属する資料であり，平成 21 年度に実施した林小学校校舎新築工事に伴う発掘調査（高松市教育委員会 2010）で確認した旧河道とほぼ同時期の資料であると考えられる。平成 21 年度の発掘調査でも多量の弥生土器片を確認しており，その供給源となる集落域が近在することを推測したが，今回の調査でさらにその可能性が高まったといえる。周辺での調査の蓄積を待ち，評価したい。

（２）古代

今回の調査区では，遺物包含層である黒褐色粘土層の上面から少数ではあるが，古代に属する遺物を確認している。遺構を確認することはできなかったが，周辺の発掘調査では古代に属する遺構を確認しており，周辺で再度土地利用がなされるようになったのであろう。

第２節　遺跡のひろがりと旧地形

今回の発掘調査範囲では，限られた範囲であるが低地性の堆積層を確認しており，断割り調査の結果北東側が高く，南西側に向かって下がる微地形を確認することができた。平成 21 年度の発掘調査（高松市教育委員会 2010）において，本調査地より西に約 100ｍの地点では西側に自然河川が流れ，東に向かって高くなる微地形が推測されている。このため，平成 21 年度発掘調査地と今回の発掘調査地の間で一度地形が高くなり，再度下降するといった地形の起伏が存在することが明らかである。こうした微地形の推測を積み重ね，上述の集落域の範囲を推定する一助としたい。

参考文献

高松市教育委員会 2010『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財発掘調査報告書第 127 集

SP 1 検出状況（西から）

地山・黒褐色粘土層（北から）

PL.2

弥生土器集合

1. 調査地遠景（南から）

2. 調査地北側遠景（西から）

3. 庇支柱施工予定地完堀状況①（西から）

4. 庇支柱施工予定地完堀状況②（西から）

5. 庇支柱施工予定地東壁断面図（西から）

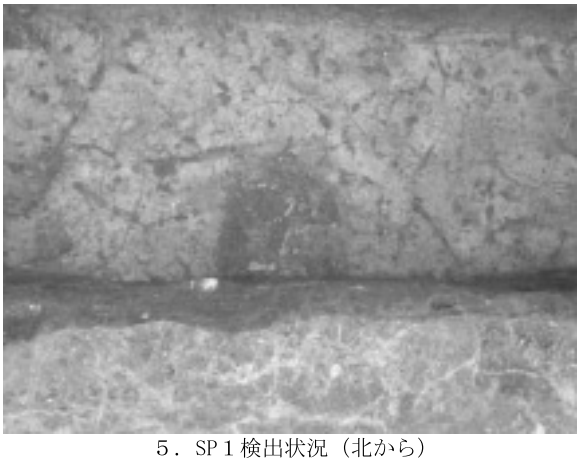
PL.4

1．調査区北端完掘状況（西から）

2．調査区南端完掘状況（東から）

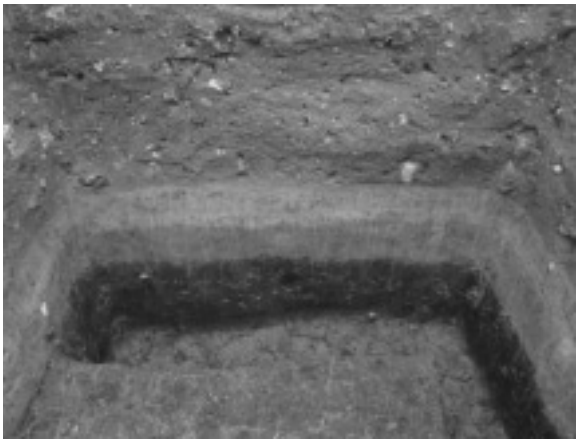
3．調査区東壁断面（南から）

4．調査区北壁断面（西から）



5．SP１検出状況（北から）

6．SP１完掘状況（西から）



7．調査区南壁東半断面（北から）

8．調査区西壁南半断面（東から）

11

23

22

81

70

99

報 告 書 抄 録

ふりがな	はやしむねたかいせき
書　　名	林宗高遺跡
副 書 名	放課後児童クラブ施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 142 集
編著者名	高上　拓，株式会社古環境研究所
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
はやしむねたかいせき 林宗高遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 はやしちょう 林町	37201		34° 18′ 04″	134° 04′ 14″	2010.11. 24.　～ 2010.12. 6.	55 ㎡	放課後児童クラブ施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はやしむねたかいせき 林宗高遺跡	集落	弥生時代	ピット	弥生土器 石鏃 土製勾玉	多量の弥生土器を含む遺物包含層

要　　約	高松市立林小学校の放課後児童クラブ施設建設に伴う調査。高松平野中央部やや南東よりに位置する。弥生時代後期後葉の土器片を多量に含む遺物包含層を検出した。住居跡などの痕跡は認められなかったが，遺物の出土状況から周辺に遺物の供給源となる集落があったことが推定できる。また，遺物包含層の下層でピット1基を確認した。包含層堆積以前の集落域が下層に存在する可能性が考えられる。

高松市埋蔵文化財調査報告第 142 集

放課後児童クラブ施設整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

平成 24 年3月 31 日

編　集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番 15 号
発　行　　高松市教育委員会
印　刷　　㈱中央印刷所

放課後児童クラブ施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

林宗高遺跡

二〇一二年三月

高松市教育委員会